

○本県のウメは日本で第2位の産地でありながら、高齢化に加え、価格の低迷、放任園の急増により、危機的状況に陥っていた。

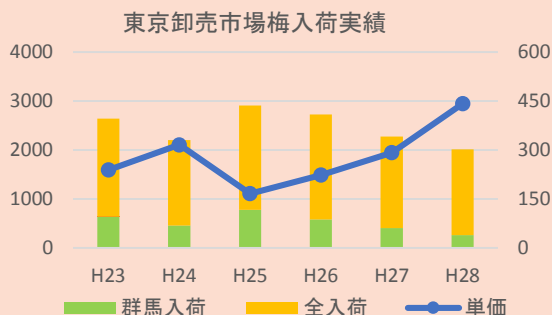
○このため普及指導室では、関係各課を連携としたウメ産地再生プロジェクトを設立し、①生産産地対策②流通・販売対策③加工・商品開発を3本柱として総合的な産地振興に取り組む。

○平成28年度にはウメの販売単価は過去最高となり、改植等産地の再生に向けて大きく動き出している。

具体的な成果

1 現品種課題解決のための課題生理と出荷システムの再構築

■陥没症対策実証ほ、収穫適期把握等の実証ほの設置及び速やかな農家への情報提供と、出荷システムの再構築により、品質が向上した。販売単価も過去最高となった。



2 「白加賀」の安定生産を図るための授粉樹の発掘と品種育成

■「白加賀」を安定生産させるための受粉樹を5品種発掘した。



写真1 新育成系統

■実需者との連携が進み、加工が前提であるウメにおいて、実需者の声が反映された育種が行われ、育種年限も短縮化された。

3 産地の再生にむけて農家が動き出す

■ウメの将来を悲観的に考え、耕作放棄が進んできた産地が、将来を見据えて改植を開始している。

普及指導員の活動

平成27年

■農業革新支援専門員が中心となり、農業事務所、農業技術センター、J A等によるプロジェクトチームを設置

■陥没症及び、収穫適期把握のための実証ほの設置、試験開始

■実需者とのマッチング開始

平成28年

■標高差にあわせた出荷システムの再構築（早朝もぎの実証）

■核色、硬核調査による適期収穫判断

■現地授粉樹のS遺伝子の解明

■実需者による新育成系統の加工適性評価開始

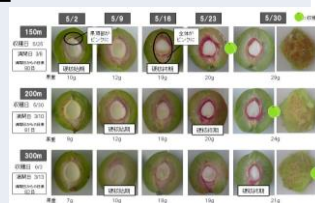


写真2 核色、硬核調査

平成29～30年度

■計画出荷によるウメ高品質維持

■陥没症発生生理の解明

■予測式に基づく適期収穫実証

■新育成系統の品種化と収穫適期把握

■機能性分析に基づく商品開発

普及指導員だからできたこと

・実需者、地元大学、市町村、県各課、農業技術センター、生産組織等と連携、総合力を発揮

・問題も解決方法も現地の中にあると考え、現地での問題解決を目指し、機動的に活動した。

「ぐんまのウメ」産地再生支援

活動期間：平成27～29年度

1. 取組の背景

本県のウメは和歌山県に次ぐ全国第2位の産地であるが、樹の老齢化や、近年の天候不順等により生産が安定せず生産量が減少している。また、本県主要品種である「白加賀」は、「陥没症」が発生しやすく、市場価格低迷の一要因となっており、対策が求められている。そこで、これらの問題を解決するため、生産者・関係機関が一体となって組織した「ウメ産地再生プロジェクト」を核として、①生産・産地対策、②加工・商品開発支援、③流通・販売対策支援について総合的に取り組み、次世代の担い手を育成し、中山間地域の耕作放棄地の発生防止、ウメ産地の振興を図った。

2. 活動内容（詳細）

- (1)陥没症対策実証ほの設置や、農業技術センターと連携して陥没症が起こる時期原因等について検証した。
- (2)収穫適期把握のための実証ほを標高別に設置、硬核状況について調査した。
- (3)現地で有望とされる受粉樹の発掘調査を農業技術センターと行った。
- (4)新育成系統の実需者とのマッチングにより、育種年限の短縮を図った。
- (5)新たな消費拡大活動としてスポーツ業界、県内高校との連携を行った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1)陥没症対策

実証ほの結果から、果実の品温が低い早朝収穫がよいことが証明され、これを踏まえて産地で、「朝もぎ」の徹底を図った。その結果、他産地では陥没症の発生が見られたが、県産品には発生がなく品質が確保されたため、高値で販売された。また、農業技術センターと連携して陥没症の発生要因について調査を行った結果、収穫時期の早い果実（未熟期）は適期以降の収穫に比べ陥没症の発生が多く、障害程度も高いことがわかってきた。

(2)収穫適期把握による出荷体系の構築

農業技術センター、西部農業事務所と連携して標高別、品種別に硬核調査を行った。その結果、硬核は標高や品種によって大きく変動することから、従来の収穫適期の考え方では用途別収穫としては適切でないことがわかった。

（写真1）

そこで、この調査結果を目揃い会などで速やかに情報提供し、品種別、用途別

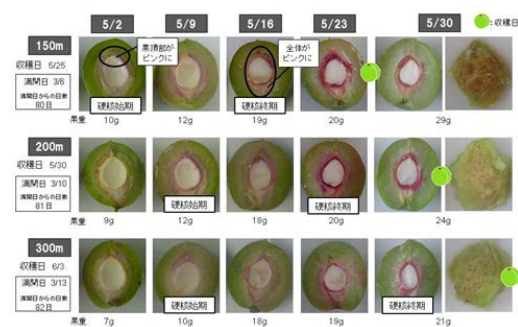


写真1 核色、硬核調査

に収穫期間をずらすことによる労力分散が可能になり、家族を中心とする労力で適期に収穫・出荷することができた。また、JA と情報共有して計画出荷ができたため、市場から高い評価を受けた。

(3)「白加賀」の安定生産のための現地の受粉樹の発掘

ここ数年「白加賀」の不作が続いている中で、開花が一致し、現地で結実の実績のある受粉樹を選定し、農業技術センターで「S 遺伝子型」の検定を行った。その結果、現地で導入されている従来からの品種の中で「白加賀」を安定的に結実させることのできる遺伝子型をもつ品種を 5 品種見つけることができた。

(4)実需者とのマッチングと商品開発

新育成系統の加工適性を確認するため、県内企業 3 社に平成 28 年度のウメを用いたカリカリ梅の加工試験を依頼したところ、各社から高評価を得た。（写真 2）

また、現地試験を早め、結実及び品質が良好であったことから、各課と連携し登録出願を早め、育種年限を短縮することができた。



写真 2 実需者(A 者、B 者)との加工試験

(5)「ぐんま三大梅林」やスポーツ等の各種イベントを活用した消費拡大

ザスパクサツ戦での対戦両チームへのウメ製品の贈呈や県内量販店で梅活用を促すジュース等の P R を実施し、新たなウメ需要の開拓を進めた。

年々評価が高まり、3 年目からは生ウメの販売も行い好評な売れ行きであった。

消費者交流会として従来の「梅干し品評会」を平成 28 年度は「ウメ博覧会」としてリニューアルし、群馬県企業のウメ加工品の P R、高校生による新たな利用方法の提案を行うとともに、特に群馬県が発祥である「カリカリ梅」について大きく情報発信した。



写真 3 ザスパクサツへのウメ製品提供

4. 農家等からの評価・コメント（共計生ウメ委員会役員 K 氏）

東日本大震災の影響で、大手の加工業者のウメの買い控えから価格が暴落、高齢化もあいまってウメの耕作放棄園が増え、産地は存亡の危機に陥った。

しかし、プロジェクトの取り組みにより、ウメの品質の向上が図られ、「群馬の白加賀」は品質が高いと評価され、現在は販売するウメが足りない状況である。ウメ部会全体で生産の機運が高まり、補助事業を活用し老木の改植を推進する

5. 普及指導員のコメント（西部農業事務所・主幹・三ツ石昌幸）

このプロジェクトは、農業事務所、農業技術センター、蚕糸園芸課と各機関が役割分担して協力して進められており、年を追う毎に実績があがってきていると感じている。販売果実の品質が向上し、価格にも反映されてきていることから農家の意識改革が進み、さらに良い選果を自ら行うなどの改善が見られるようになり、産地でも再生に向けたさまざまな取り組みが始まって来ている。

29年度は「消費者からの援農システム」について検討を行っており、労力の問題解決に向けて支援を行っていく予定である。

6. 現状・今後の展開等

(1)満開からの積算気温を利用した収穫適期の判定による出荷体系の再構築を図るとともに、陥没症が発生しにくい時期や時間帯を特定して、発生防止対策を徹底し、品質向上による有利販売に結びつける。

(2)現地で発掘した受粉樹に向く品種の遺伝子型検定結果を各部会に返し、部会で増殖し、受粉樹割合を高めるように働きかけ、産地としての生産安定を図っていく。

(3)新育成系統の用途別加工適期を把握し、利用方法の拡大を図っていく。

(4)これまで得られた各種の試験結果を踏まえた計画生産、計画販売による有利販売、補助事業なども活用した担い手への農地集積、新規就農者の掘り起こし等を体系的に推進し、本県ウメ産地の維持・発展を目指す。